開発・保護と地域

市川光雄

はじめに

先ほど古川さんは、地域の景観についてずいぶんと悲観的な見方をされました。将来、地球上にはいくつかの保護地域が点として残るだろうが、それ以外のところはすべて開発され、破壊しつくされてしまう。そういうふうに開発・破壊地域と保護地域に景観が二極化してくるだろうといわれました。私としては、この両極の間に、自然と人間の関係がもう少ししっくりいくような道はないものか、と考えているわけです。私自身もアフリカなどで起きつつあることを見ていると、悲観的な気がしてならないのですが、そんなことは不可能だよ、と言い切ってしまってはみもふたもないので、ここではそこに希望をつないで、お話しをしたいと思います。

いわゆる開発の影響ということで、私達人類学をやっている者がまず思い浮かべるのは、これまでの地域における固有の生活・文化が、最近の伐採やダム建設、プランテーションなどの農業開発、あるいは鉱山開発などのいわゆる資本主義的な開発によってどのような影響を受けているか、ということだと思います。しかし私達のフィールドというのは、例えば私がこの20年くらいかかわってきた中央アフリカの熱帯雨林というようなところでは、まだ開発があまり進んでいないところ、つまりいわゆる「豊かな自然」あるいは「多様な生物相」というのがまだ残っていて、それが開発計画とか人口増加、移住などによって最近危なくなっているところでもあるわけです。ですからそういうところでは、「開発」と同時に「自然保護」も当然大きな問題になっています。「開発」に直面する地域というのは、同時に「保護」計画に直面する地域だということになるわけです。

そこでまず今日は、そういう地域の固有文化と自然保護の対象となるような自然の多様性の間には実は深い関係があるということを話してみたいと思います。例えば、世界のいろいろな地域の自然の中でも、東南アジアのインドネシアとか、南アジアのインド、アフリカのザイール、カメルーン、南米のブラジルなどは特に生物的多様性の豊かな、「超多様性（megadiversity」を有する国ですが、そういうところでは文化的多様性もまた際だって高いわけです。いま文化的な多様性を使用言語の数であらわすと、インドネシアには実に670もの言語があり、インドでは380、カメルーンでは270、ザイールでは210、ブラジルでは210という具合に、生物的多様性が特に豊かだといわれる国は、軒並み200以上の言語が話されている多言語・多文化国家です。こういうふうに統計的に見ると、何か、文化的多様性（使用言語の数）と生物多様性の間には相関があるのではないかということになるわけです。

これは、いわゆる「未開地域」では、一方では大規模な開発によって自然が破壊されていないこと、また他方では、社会・文化面でも、国家的な統治のために文化的な同質化（国語、国民文化等による）、あるいは文化的な求心化が十分に進んでいないからだといえるかもしれません。そうならば自然の多様性と文化の多様性の結びつきは偶然ということになります。しかし、私は、それが偶然ではない地域があり、そこでは両者の間に内的な関係があるという気がするのです。

そうすると問題は、なぜ固有文化は生物的な多様性が高いところで多く見られるのか、ということになります。その理由のひとつとして、生物多様性が固有文化存立の自然的基盤になっていることが考えられます。またそれと同時に、固有文化からの何らかの意図的、非意図的働きかけによって生物多様性が維持されているという面もあるのではないかと思います。そして、いわゆる開発が固有文化と自然多様性の両方を荒廃させるのは、固有文化における「自然と人間の関係」といわゆる近代的、資本主義的な開発が目指す自然の利用様式とは根本的に異なるからではないか、ということです。これらの点について、特に中央アフリカの熱帯雨林地域の例から具体的に検討してみたいと思います。

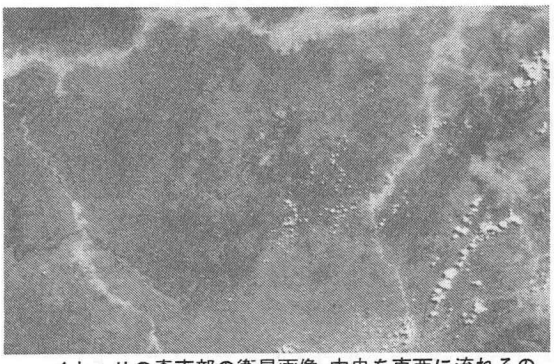
中央アフリカ熱帯雨林域で進む開発と保護計画

中央アフリカのコンゴ川流域には、世界の熱帯雨林の５分の１、１億５千万ヘクタールをしめる広大な熱帯雨林があります。アフリカの熱帯雨林は、大西洋の沿岸部では15世紀末以降の西欧との接触によって、早くから森林破壊が進んでいましたが、内陸部ではコンゴ川沿いの交通の便が悪いこともあって、これまでは大規模な開発の手が比較的及んでいませんでした。コンゴ川の下流には、スタンレイが最初にこの川を下ったときに辛酸をなめた大瀑布があって、それが大きな障害になっていたのです。しかし最近になって、カメルーンやコンゴなどでは道路などのインフラが整備され、木材の伐採やプランテーションの建設など、急速ないきおいで開発の手が延びています。

例えばコンゴ北部は、ゴリラやチンパンジー等の希少動物の生息密度が高いところとして有名ですが、ここではすでに何十万ヘクタールもの森林が伐採計画の対象になっています。カメルーンの東南部の森ではバカ・ピグミーが住む森の大半が伐採地区、あるいは将来の伐採のために残してある地区になってしまいました。私が長年、調査地にしてきたザイールのイトゥリの森では道路事情が極めて悪いので、本格的な伐採はまだ始まっていませんが、アブラヤシやコーヒーのプランテーションなどは以前からありました。

このイトゥリの森では最近、砂金の採集が盛んになってきました。森の中に砂金が見つかると、少なくともここ数十年間は人間が住んでいなくて、野生動物の絶好の繁殖場だったようなところにまで、砂金を採取するために急激に人口が流入します。そこで耕地を開墾したり、集中的な狩猟を行うので、そういうところでは生態系の劣化が懸念されています。

イトゥリの森を人工衛星の画像で見ると、森林の破壊の様子がよくわかります。私はこういう画像を使って、人間の居住跡や畑の跡、かつての交易路などを特定して、この地域の生態史、つまり人間と自然の相互作用の歴史を復原しようとしたのですが、画像を見て、それとは別な点で驚いてしまいました。いま私達のところでは、衛星データを使って地域の解析をしている人がいますが、その人に頼んで植生の状態がよく反映されるように画像処理をしてもらいました。だいたい、赤い色が裸地、ないし貧弱な草地で、黄色が畑、薄い緑が二次林という具合に、緑色が濃くなるほど密な植生を表すようにしてもらったわけです。そうすると、イトゥリの森の中にも黄緑や薄い緑の部分があちこちにあることがわかりました。特に衝撃的だったのは、ナイル川水系とコンゴ川水系を分けている大地溝帯のエスカープメントの西側、つまりイトゥリの森の南東部で、大きな円形状に森が蝕まれて、黄緑部分が広がっていたことです。大地溝帯の西側から、ちょうど何かが「爆発」したような感じで、森林の破壊が進んでいるのです。これは、私達がこれまでに認識していた森林の開発とはずいぶん様子が違います。従来の開発というのは、道路に沿って人々が流入し、そこから帯状に周辺部で畑が開かれてゆくという、線状の開発パターンをとっていました。しかしこの新しい開発のされ方は、もっと爆発的な感じです。



イトゥリの森東部の衛星画像。中央を東西に流れるのがコンゴ川の支流イトゥリ川、右下はナイル川の支流セムリキ川。中央下部に円形の森林後退部がみえる。

さらに画像を拡大してみると、この円形部分を構成する点々が、焼畑（赤く見える）とその跡地（うすい黄緑）であることがわかりました。プランテーションや伐採などの大規模開発だけでなく、こうした形でも確実に「開発」が進行していることがわかるのです。

なぜ、こんな形で開発が起きるのか。このイトゥリの森の東部には、大地溝帯を構成する丘陵地帯がありますが、ここは火山性の良好な土壌のために昔から農業が盛んなところでした。このあたりからいま、難民問題で騒がれているルワンダにかけては、中央アフリカ有数の農業

中心地で人口密度も非常に高いのです。近年、この地域で人口増加や換金作物栽培の普及によって耕地不足が深刻化しています。そこで過剰人口を抱えたこの丘陵地域から、人口希薄な熱帯林への移住が続いているのです。丘陵の上から見ると、下の森でどんどん畑が開墾されているのがわかります。その様子がランドサットの画像にもあらわれているのです。

一方、こうした開発の波に対抗して、自然保護の動きも活発化しています。イトゥリの森では、キリンに似た珍獣オカピの保護のために140万ヘクタールに及ぶオカピの保護区が指定されていますが、この森には、古くから「森の民」が生活しているのです。いわゆるピグミー系の森林狩猟採集民で、ザイール東部からカメルーンにかけてのコンゴ川流域の東西約2000㎞の範囲にわたって分布するグループの一つで、ムブティ、あるいは複数形でバンブティと呼ばれている人々です。彼らは多種多様な森の資源に有形、無形の形で依存して生活しています。

現在の保護計画がこれまでの保護区や国立公園計画と異なる点は、その内部に何とかこうした「森の民」が残って生活できるようにしようと模索している点でしょう。しかし、どういう形で、どの程度、こうした住民の活動を認めるかという点はまだ未解決のままです。

いずれにせよ、現在進行中の開発や自然保護計画によって、これまでのような人間と自然の関係の継続が困難になっています。しかし、開発や保護によって、森の民の生活基盤が奪われる、あるいは減少するということだけが問題なのではありません。そうした外側から生活基盤を脅かすような開発、いいかえれば「生態系あるいは環境の開発」とは別に、あるいはそれにともなって、さまざまな物資の交換、つまり地域の経済を通してゲリラ的に彼らの生活の内部に入り込んでくる、いわば「生活の開発」といったものがあります。さらに、そうした生活に入り込んだ開発が彼らの人生観や価値観等を変容させてゆくといった、いわば「価値観の開発」あるいは「開発の内面化」があります。環境・生活・意識といったさまざまなレベルの開発が一体となって進行する、いわゆる統合的世界資本主義によって、従来のような人間と自然との関係が根本的に変えられようとしています。このようなレベルでの開発が「地域の人間と自然の関係」に対してどのような問題を持っているのかについて、最後に少し触れてみたいと思います。

ムブティのキャンプ。下の女性はGilbertiodendronの豆をすりおろしている。まん中の櫛をつけた女性は、Rothmanniaという木の実の黒い汁を別の女性の顔に塗っている。

森に依存した文化

まず、地域の生態系の中で人間と自然がどのような関係にあるかを見てみたいと思います。私が1970年代の中頃からたびたび訪問している中央アフリカのザイール共和国のイトゥリの森に住むムブティ・ピグミーと森の関係についてお話しします。

例えば、彼らの野営地のスナップを見るだけでも、彼らの生活、文化というものが森の資源に強く依存していることがよくわかります。野営地では、森の木の実をすりおろして調理している女の人がいる。その横に見える家は100％森の素材だけでできている。女の人が髪に刺した櫛や、手にもっているザルなどの物質文化も植物から作る。そして、キャンプそのものも森の中につくられている。彼らが森という自然に密着した文化・生活を営んでいることはこうした一枚の写真からもよくわかります。

特に植物との関わりについては、実に多種多様な植物世界との関わりが見られます。現在、我々はこうした森の民による植物の利用と知識に関する情報をデータベースにまとめるプロジェクト（アフローラ・プロジェクト）を進めています。この計画の意図は、一つには森の民が育んできた伝統的な知識を保存することですが、もう一つは、従来はマイナー・プロダクトとして木材等より経済的に低く見られてきた、いわゆる非木材森林資源の持つポテンシャルに目を向けようというわけです。

イトゥリの森でも、これまで1000点以上、約600種に及ぶ植物を採集しました。これでも森の植物の一部にすぎないけれども、彼らと植物との関係がどのようなものかという概況を知るには十分だと思います。結論からいうと、ほとんどの植物が何らかの意味で彼らの生活で使われているということです。意図的に用いてはいなくても、何かの役割を果たしている。

まず、食用となる植物が100種以上もあります。この中にはイルビンギア・ナッツやアフリカショウガのように地域の市場で売買されているものや、将来の食料資源として注目を集めているものも少なくありません。ちなみにこれらの産物は、植物が生きたままの状態で生み出すもので、植物の最終産物であり死骸である木材の利用とは異なり、生きた植物の存在を前提としているものですから、森林の保護とは矛盾しない。そういうところから、森林の利用と保護を結びつけるものとしても、いま注目されているところです。マーケットに行くと、こういう森の産物がコンソメなんかと一緒に調味料として売られています。都市に住んでいる人達にとっても、こういった森の産物が「故郷の味」として忘れられないものになっているのだろうと思います。

また、魚毒や矢毒などに使われる植物も100種以上もあります。熱帯雨林の植物は動物の食

害に対する適応として有毒な二次生産物（secondary compound）を持つものが多く、上手に使えばこれらが薬になる。そうした中から、例えば心臓に効くとされる植物も見つかっているわけです。

いろいろな道具や装飾品の素材、建材等に使われる植物は300種以上もあります。彼らの道具類は全部あわせても100点程で、本当に少ない。実にシンプルなものですが、その８割以上のものが植物性素材を利用する。彼らの物質文化は文字どおり「森の文化」といってよいでしょう。

植物はまた、さまざまな儀礼にも使われます。狩猟の際にはある種の木の葉をいぶして、その煙を体にあてて匂いを取り除く。あるいは、ある種の植物を焼いた炭を顔に塗って、体が見えないようにする。つまり、自分の体を森と同化させるというわけです。このようにリチュアルな目的で用いられるものが150種余りあります。

その他、直接は役に立たなくても間接的に役だっているもの、例えば彼らの好物の蜂蜜の蜜源となる植物があります。植物はまた種々の動物の餌になり、それらの動物を彼らが狩猟する。彼らは動物の餌や隠れ家などをよく知っていて、動物が食べる果実の季節になるとその近くに足場を作って待ち伏せて獲物を射たりします。

要するに、物質的にも精神的にも、また直接的、間接的に、生活のあらゆる面で森の植物が利用されているというわけです。さらに森の中には森の父（主）と呼ばれる存在がいて、その森の主の木として伐ってはいけないとされる植物（ *Uvariopsis congolana* ）もある。

一言でいえば、森の民の文化は植物世界が持つ多様性に依存した文化だということでしょう。ですから、森を壊してその文化だけを残すことはなかなか難しいだろうと私は思います。

人間活動の影響

森の民の文化が森に強く依存していることを指摘しましたが、森の方も現在のような姿になったのは、人間の活動に依存しているという面があると思います。

アフリカの森林帯における人間の居住の歴史は東南アジアの場合などよりはるかに古くて、少なくとも数千年前からピグミー系の狩猟採集民が森に住んでいたといわれています。それに加えて、いまから２、３千年前くらいから、バントゥー系の農耕民も森の中で農業を始めた。アフリカ森林地帯のバントゥー系農耕民は、もともと西アフリカのサバンナで雑穀類の栽培をしていたわけですが、彼らが、アジアから伝わった作物、つまり森林での栽培に適したプランテンバナナ、タロ、ヤム等の作物を得て、さらに森林を開墾する鉄器の製造技術を身につけて、

森林地帯に移住を始めたのは、いまから２、３千年前だといわれています。

そして、何が彼らをそんなに動かしたのかはわからないが、バントゥー系の農耕民はその後もぞくぞくと東及び南に向かって移動を続けた。紀元500年頃、つまり森の中への移動を始めてから1000年から1500年くらいの間には、もう直線距離にして3000～4000kmも離れたアフリカの東海岸（インド洋岸）に達しています。紀元1000年くらいには、一部の湿地帯やイトゥリのような最奥部の森を除いて、コンゴ盆地の森林地帯の大半に分布を広げたといわれています。焼畑を行いながらの移動であったことを考えると、この移動の速さは驚異的です。そしてこの移動の過程で各地に二次林を残していったわけです。その後も人口密度が増えるにつれて、分布を広げていった。そうしたことの結果、この地域の森のいたるところで原生的植生の撹乱があったと見るのが妥当ではないかと思います。アフリカの熱帯雨林における広範な人為の痕跡については、植物生態学者のリチャーズなども、「アフリカでは一見原生林のように見える森も、実は古い二次林であることが多い」と述べているとおりです。

イトゥリの森なども、飛行機の上などから見ると一見人跡未踏な広大な原生林が広がっているように見える。しかし、衛星写真などでよく見ると、あちこちに植被のやや薄いところがみえます。そういうところは古い道路や集落の跡地の二次林です。小さな集落やキャンプの跡地はさらにわかりにくいけれども、少なくともイトゥリのようなところでは森の内部に入ってみると、それはよくわかる。すなわち、樹種構成などにかなりの相違が見られるのです。いわゆる原生的な植生はジャケツイバラ亜科の喬木が多く、ところによっては純林をつくる（*Gibertiodendron dewevreii*）ものもあります。しかし一見原生林のように見えても、古い二次林には原生林の主要樹種であるジャケツイバラ亜科の大木がない。代わりに半落葉生のニレ科、センダン科、ウルシ科、トウダイグサ科の樹種が多くなっていることで区別できるというわけです。

イトゥリの森にはこのような古い二次林性パッチが原生林の中に散在しているのです。もともと森というのはさまざまな更新段階にある植生のモザイクで、いわゆる原生的な植生のあちこちに風雨による倒木などで自然に生じたギャップがある。それから更新したさまざまな段階の二次植生が原生林の中にモザイク状に見られるわけです。イトゥリの森ではこうした自然の植生変化のサイクルに人間の手が加わって、それが増幅されているのだといってよいと思います。人為的な二次林には、狩猟採集民のキャンプの跡や、蜂蜜採集のために木を切り倒した跡などがありますが、それよりも植生に大きな影響を与えるものは農耕活動です。

人工衛星の画像（ランドサット）を見ると、古い街道や農耕民の大きな集落、焼畑の跡、それか

ら、かつてのアラブや植民地政府の交易所など、放棄されてから何十年も経って、現在では森になっているようなところでも、植生が薄くなったところとしてはっきりと確認できます。1930～40年代に森を貫通する道路がつくられ、植民地政府によって、その道路沿いに住民が強制的に定住化させられたのですが、それ以前には、森の中にこのように集落が散在していたことがわかります。

ところで、こうした二次林が実は狩猟採集民の生活にとって重要な役割を果たしているのです。ムブティ・ピグミーのキャンプ地では、下ばえ等の植生を刈り払いますが、そうすると地表まで太陽の光があたるようになります。そしてキャンプが放棄されると、そこには二次植生が生い茂ってきます。ところがこの中には、食用となる植物が多いのです。キャンプ跡地には、アフリカショウガや、パイナップルのような果物をつけるクワ科の *Myrianthus* sp. などの食用植物がよく生えています。そのほか *Canarium*、*Ricinodendron* など、十分な日光が当たるところでないと発芽しなかったり、成長しなかったりする、いわゆる陽樹が見られる。彼らの主要な食用植物の発芽や成長の条件を検討してみると、その中には、こうした明るい二次林性の環境を好む植物が少なくないのです。つまり、キャンプ跡地などの二次林的環境は、これらの植物の成長に格好の成長と繁殖の場を提供していることになります。

あるいは、彼らが食物として利用した野生植物の廃棄部分（種や皮など）、排泄物などから新たな芽生えが生じている。キャンプの片隅では、クワ科の *Treculia africana*（種子を食用にする）やキョウチクトウ科の *Landolphia*（あま酸っぱい実を食べる）などが発芽しています。このようにゴミ捨て場から生える植物には、この他にもヤマノイモや *Canarium*（ローソクの木）などがあって、重要な植物が多い。特に *Landolphia* のような植物は、人間や動物がこれを種ごと呑込んで消化管の中を通すことによって、発芽しやすくなった種を、日当りのよいところで排せつすることによって、発芽が促進されているわけです。人間の居住の跡はそういう有用資源のリサイクルの場です。ゴミというものは現代社会では生活から排除して燃したり捨ててしまうことが多いが、ここのゴミ捨て場は、発芽の場であったり、土壌を肥沃にしたり、資源のリサイクルの場として、重要な役割を果たしているというわけです。

さらに人間が移動した後の土地は別の意味でも重要です。特に農耕民が放棄した焼畑の跡にはまだ食物が残っている。そこは野生動物にとっては格好の餌場で、ここには特に二次林を好むサルなどの動物が集まってきます。それを狩猟採集民のムブティが狩り、その肉をバントゥー系の農耕民がつくる農作物と交換する。農耕民はそうして耕作を続ける。こういうふうに考えると、この地域の森は、狩猟採集民、農耕民、植物、動物の間の相互作用によって人間

の生活環境として徐々に整えられてきた可能性があると思います。

このような人間活動のインパクトは、生態系の自然回復力を損なうほどのものではない、ということが重要です。それと同時に、そうしたインパクトによって、生物相自体が豊かになったことにも注目する必要があると思います。イトゥリの森には、本来はサバンナ性の動物だが、環境に対する人為的影響（二次林化）によって分布をのばしてきた動物、つまりサバンナ地域から二次林をつたって移入してきたと思われる動物、例えばサバンナヒヒ、ハイエナ、ケインラット等もいて、森の動物相は森林性とサバンナ性の動物をミックスしたような状態になっています。それらが一緒になって森の生態系をつくっているのです。つまり、地域生態系はそのような人間と自然の長い間の相互作用を通じて形成された歴史的産物だということです。

以上をまとめますと、人間は地域の自然に多くを依存しているが、逆に自然の方も人間活動の影響を受ける。自然の多様性と文化が互いに支えあって地域の生態系を維持してきた、ということになると思います。ですからいま、ワイルドライフ・サンクチュアリをつくって自然を保護しようという動きが盛んにありますが、もちろんそれが必要な地域が多いとは思いますが、このように一方では完全に人間を排除したサンクチュアリをつくり、その外ではどんどん開発を進めて何をしてもいいということになるとやはり問題です。そういう形の保護は極端に二元論的というか、近代文明における自然と人間の対立を極限化したようなものだし、第一、そういうふうにしてできた自然の姿自体も歪曲されかねないという問題があるという気がします。

より広い社会との関係

森と人の共存世界というか、そういうものが一体となった地域の生態系について紹介してきましたが、しかし、そうした地域の生態系は世界の他の社会から独立して存在しているわけではありません。現在は、よくいわれているように経済的、政治的なグローバリゼーションが世界各地で進行しています。開発とか保護もそういうグローバリゼーションの一つといってよいでしょう。いわゆる大規模開発とか自然保護計画は、地域のいわば外側から迫ってきて、生活基盤を脅かすもので、住民にとってはいわば「寝耳に水」のようなものですが、これとは別に地域の生活や活動を巻き込んで入ってくる「開発」があります。こうした「生活に入り込んだ開発」によって、地域の生活の変容は確実に進みつつあるし、時代の流れとしても、それは避けられないと思います。

例えば、ムブティの女性達もいまではほとんどの人がプリント模様の布地を着けていますが、それらの布地は外国からの輸入品です。彼女達は農耕民の農作業の手伝いをしたり、あるいは

獣肉との交換によってこれらの布地を得ているわけです。あるいは若者達も、森から村に出てくるときには、村の男達が着ているようなカラフルな服を着ておしゃれをしたいと思っている。こうしたものを手に入れるためには、何らかの形で外部の経済に参加しなくてはならないわけです。現在では、獣肉をはじめとする林産物の交易や農作業の補助などがこれらの物資を得る主要な方法となっています。

このようなより広い社会の経済との接触は、イトゥリの森のような奥地でも100年以上前に遡るものです。1905年前後に新婚旅行でイトゥリを訪れたイギリス人の旅行家が撮影した写真をみると、その当時すでに、キョウチクトウ科の樹液（ゴム）や象牙などがこの地域の代表的な産物として輸出されていたことがわかります。初期の植民地時代には、この２つで輸出高の95％を占めていたともいわれています。天然ゴムの方は、過剰採取のために資源が短期間のうちに枯渇してしまった。象牙の方は、この地域ではムブティの狩猟に負うところも大きかったのですが、象の頭数が激減したので限定的な保護政策がとられるようになり、いまでは一部地域を除いて象狩りも衰退しています。

つまりこのことは、森の民の自然との関係と、いわゆる資本主義的な自然利用とは、根本的に異なっていることをよく物語っていると思います。一言でいえば、それは「生態系の論理」による森の利用と「市場経済の論理」による利用の違いということでしょう。一方は、森の民の森林利用についてみたように、多様な資源の安定利用を図るものだし、他方は市場価値を持つ少数の資源の効率的、かつ最大限の利用しか眼中にない、といってもよいでしょう。そして同時にこれは、社会・生態系の安定性の維持を目指すのか、それとも社会の発展や富の最大化を志向するか、という対比にも置き換えられると思います。こういうふうに異なるものをどうつないでいくか。そこに地域と世界の共存、両者の接合（あるいは折衷）をどのように行うかという非常に難しい問題があるのだと思います。しかし、当面の問題は、地域を取り囲む経済、特にアフリカ諸国の国民経済が惨たんたる状況にあることを考えれば、そうした不安定な国民経済に対して地域の生活をどう維持していくかという問題になると思います。

例えばザイールでは、国民経済がめちゃくちゃで、甚だしいインフレが続いています。これまでに何度も通貨の切下げが行われたり、あるいは高額紙幣を突然に変更して、それにともなって古い紙幣を無効にするというようなことが行われました。インフレの例をあげますと、ザイールでは独立後15、6年の間に物価は60倍に上昇しましたが、しかし、実質賃金は逆に４分の１に下がってしまいました。特に、1970年代半ば以降の経済の悪化は著しくて、年率100％以上のインフレがずっと続いていました。1980年代の半ばの実質所得は、独立当初の10分の

1にまで減少してしまったということです。これでは賃金だけでまともにやっていては暮らせない。事実、この国の都市ではさまざまな内職、物資の横流しなどのインフォーマル・セクターが活発で、それが市民の生活を支えているという面があるといわれています。

一方、地方では、現金の値打ちがなくなるのにつれて、物々交換が復活、あるいは強化されています。しかもイトゥリの森などでは、現金価格の変動にかかわらず、一定のバーターのレートが維持されていたのです。1975から1987年の12年間に食料の現金価格は500から1000倍に上がったのにもかかわらず、労賃は250倍にしかならない。いろいろな物資の間の現金による相対価格も変化している。ムブティの供給する労働力は、それと交換される農作物と現金価格と比較すると、わずか2分の1の価格になってしまいました。しかしこの地域では、こうした現金価格とは別に物々交換（あるいは現物支給）のレートというのがあり、それは現金価格、あるいはそれらの相対価格の変動にもかかわらず、かなり一定に維持されていた。例えば1987年当時、ムブティが一日農作業の手伝いなどで働くと50ザイール（約100円）くらいの賃金がもらえた。しかし実際は、彼らが現金で支払いを受けるのは特別な場合だけで、多くは現物払いで、主食であるキャッサバなどを現物でもらうことが多い。この場合は1日の労働に対して15、6キログラムのキャッサバをもらうわけですが、これは現金価格にすると現地で100〜150ザイールに相当する量です。同じ労働に対して現金払いの場合と現物払いでは2倍あるいはそれ以上になるという差が存在する。つまりここでは、現金価格でみると、ムブティの労賃は食料などの他の物資の値上がりについていっていないが、それにもかかわらず、現物支給の場合には以前からのレートのままで安定した交換が行われているのです。

同様な例は、ムブティが森で狩る獣肉と農作物の交換の場合にも見られます。ムブティの主要な猟法はネットハンティングといって、ちょうどテニスのネットのような網を用いた共同猟です。この猟法だと、比較的安定して獲物がとれるので、1950年代からこれでとった肉の商業的な交易が始まりました。ムブティが森で狩った動物の肉を、近くの町から交易人がやってきて食料や衣類などと交換し、それを火で乾燥させて持ち帰る。牛や豚、ヤギなどの家畜の少ないこの地域では野生の肉が地域の人々の貴重な蛋白源になります。また、こうした地方都市の周辺では森林の荒廃が進み、人々は急速に自然との接触を失っているので、そういう人々にとって森の獣の肉は、魚や家畜等からは得られない「野生の力」を与えるものとして重宝されてもいます。大きな町では「野生の肉」ということでプレミアがついて、牛肉などより高価な値段がついているくらいです。

ところでムブティが獣肉を交換する場合、体重4、5kgのブルーダイカーなら首と内臓を除

いた1頭分が交換の1単位になっています。体重20kg程度の森林性のアンテロープなら四肢の部分をわけて4単位にして交換するわけです。重量にするとだいたい骨付きで1.5～2kgです。これをコップ10杯、約2kgのキャッサバの粉と交換します。肉とキャッサバ粉の現金による相対価格が変わっても、このレートはほとんど変化がありません。どうしてこういうことになるのか。当事者に聞くと、現金と食物では「値段」が違う、ということで、お互いに納得しているのです。

つまり都市部では、賃金生活者の生活が不安定な経済によってどんどん悪化していく一方で、こういう地方のレベルでは、現金価格の変動に左右されない安定した物々交換の交換レートが存在している。ある意味では二重の経済が存在するわけです。そして、こうした地域社会における物々交換が、めちゃくちゃな国民経済に対するバッファの役割を果たしている。今後、外側からどんどん物資が入って来るようになると、こういう状態をいつまで続けることができるのかわかりませんが、少なくとも現在この地域では、首都キンシャサの為替レートやひいては世界の株式市況やコーヒーやカカオの相場などの変動、そういうものの影響を直接に受けるようになることが「生活の中に開発が入り込む」ことだとすると、そういう外部の経済に簡単に左右されないような安定した地域の交換があるといってよいように思います。開発ということで現金経済化を性急に進めようとするよりも、そういう地域の交換が現在の状況の中で果たしている役割をもっと評価してもよいのではないかと思います。また、このような地域の交換・経済といったものが「開発の内面化」、つまりライフスタイルあるいは価値観の変容や、あるいは生態系の開発（この場合は資源の乱開発）に対して果たしている役割についても検討する必要があると思います。

森の民のライフスタイルというのは、基本的には「その日暮らし」です。その日に手にいれたものは、その日あるいは次の日くらいには消費してしまう。蓄えということをしない。少なくともそれを前提にした生活ではありません。こういうライフスタイルは、必要なものはいつでも森で手に入る、という自然の豊かさに対する信頼に裏づけられているのです。だから、これは森の民ではないけれども、砂漠の狩人ブッシュマンが農耕を始めるように説得されたときに、「有り余るほどの食糧が原野にあるのに、なぜわざわざまた種を蒔かなければならないのか」と言ったというようなことになるわけです。

物々交換はこうした刹那的、あるいは現在志向型の彼らのライフスタイルにもよく合っているのです。ムブティが交換で手に入れるものは、食料や衣類その他の日常使われる消費物資がほとんどです。彼らは別に肉やその他の林産物の交換によって利益を得ようとしているのでは

ない。だから、当面の欲しいモノが手に入ると、それ以上は働くための動機づけがなくなってなってしまう（だからこそ交易人は新しい商品を持ってきて、彼らの欲望を刺激しようとするのですが）。勤勉それ自体を徳とするような価値観もあまり持っていないといってよいでしょう。そのような消費物資、つまり自分達が直接使う価値の獲得を目的とした安定した地域の交換が、外部のより広い社会のめちゃくちゃな経済に対するバッファになっているのです。もし、このようなバッファがなかったら、肉の現金価格が相対的に低下したときには、それまでと同じものを得るために余計に獲物をとらなければならない。あるいは現金経済に刺激されて、肉の獲得量を最大化しようとしたり、効率一辺倒の生活を求めたり、あるいは当面必要でない量の獲物まで一生懸命にとって、それを現金に替えていくというように、ライフスタイルが変わってゆく、いいかえれば「開発が内面化」されてゆくことになるでしょう。そうなると、環境や資源に対する圧力は、いまよりはずっと大きくなると思います。だから、ムブティが関わっているような安定した交換は、投機的で変動の激しい資本主義的な市場経済に対して地域の生活を守るバッファであるとともに、乱開発による地域の生態系（資源基盤）の劣化をも防いできたという面もあると思います。

実際、肉の交易が本格的に始まった1950年代から20年以上もたった1970年代の半ばに私が最初にイトゥリの森を訪れたとき、彼らの主要な猟法であるネットハンティングでどのくらいの獲物をとっているか、狩猟統計をとってみました。そうすると、年間の捕獲量はせいぜい現存量（そこにいる動物の数、あるいはバイオマス）の10～15％程度だという推定になったのです。この程度の狩猟圧ならば、動物のもつ自然の繁殖力によって、回復しうる量であり、十分に持続的な狩猟が可能と思われます。

こういう状態が果たしていつまで続くのか私にはわかりません。しかし、外からの経済が極めて不安定であること、それにもかかわらずそれとまったく無縁に暮らすことができないこと、そしてそういった事態に対して、現時点では彼らは森に対する共有権など、資源に対する何の権利も与えられておらず（森は国有地になっている）、資源を管理、あるいはコントロールする術がないこと、そういうことを考えれば、当面はこうした交換体系の果たすべき役割があるように思います。「開発」とか「経済的な近代化」ということが、こうした地域の交換システムを国家とか世界の経済と同じ土俵の上に持ってくることを意味するとしたら、少なくとも現在のような状況では、そのような開発を性急に進めることは地域の生態系や住民の生活・文化に対する影響が大きいのではないかと思います。

コメント

遅　沢　克　也

世界システムに巻き込まれつつある熱帯地域の多様な生き方や固有な文化を今後どういう形で継承していけるのか。私の考えていることを述べてコメントに変えさせていただきます。

市川さんのピグミーの話を聞くたびに、なんと素晴らしい人々なのか、何とか彼らの生き方を残す手だてはないものかと考えさせられます。今日のスライドにはなかったのですが、あのピグミーの踊り手、少女達の表情はほんとうに素晴らしい。私が接した東南アジアのサゴ農民は、こすくてしたたかで、薄汚い。開発の波が押し寄せてくるとき、彼らは時にはイスラムを出し、時にはアミニズムを、時には慣習法をだしながら、サーバイバルする。そういう過程で新しいコンセプトが生まれるといった具合です。正直いって、負けたというか、ああいう調査地にいけばよかったとうらやましく思います。

吉田さんがいわれた我々側がどう価値転換をしうるかということに関連することなのですが、私は彼らの価値観に積極的に関わっていけないかと考えています。スラウェシ島周辺には、海洋資源や森林資源を巧みに利用する固有な技術体系や知識が存在するが、こうしたものを維持する一つの手だてとして、ここの生業を巡る旅ができないかと考えています。彼らの精神世界がほんとうにゆたかで価値のあるものならば、我々側から、研究者としてではなくて、巡礼者になって、彼らを師と敬い、彼らの生業を具体的に体験しながら彼らの価値観を学ぶ。そこでの文化的事象に参加しながら我々自身の生き方を見つめ直すようなことができないかと考えています。こういうことができるかどうかが一つのポイントになるのではないか。もっとも、私自身、家族を捨てられるかどうかいろいろ問題はありますが･･･。

例えば、南スラウェシのルウのサゴ社会では森に入ってサゴヤシの伐採からサゴ洗いまでをします。夜は古老から伝承神話に耳を傾ける。参加者はルウの森の精霊を信じきれる者でなければなりません。

バジョエの海の社会では、素潜り漁などを学びながら海の神への信仰を追体験します。我々の中からバジョエの後継者は生まれないでしょうか。

ブルクンバの帆船建造基地では船大工に師事し、船材の採取から建造までを学ぶ。日本の船大工が参加し、伝統と伝統がぶつかりあう。そこから、新しいタイプの木造船が造られるかもしれません。

セコの山地社会では銛を使った狩猟を学びながら、自然との関わり方の伝承を聞く。さまざまな儀礼にも参加する。そうした生業を巡る旅を仕掛けるのはどうでしょうか。

いま、四国にいて、大変気になっているのは、最近、若者の一人遍路が増えていることだ。かつて修験者達は古神道や空海密教を踏まえながら、四国の聖地を掘り起こし、踏み固めていきました。それが八十八カ所の札所となっていったといわれています。熱帯の固有の文化を将来に継承する手だてとしてこうした生業を巡る旅を仕掛けるのはどうかと考えています。

市川さんにお聞きしたいのですが、ピグミーも、さまざまなレベルの開発によって変容を迫られているとすれば、具体的に今後どのような手だてが考えられるか。そのへんのことをお聞きしたい。

質疑応答

市川　ちょっと言い逃れになるかも知れないけれど、他人の生活をどうしたらよいかということを考えるよりもまず、そういう人たちの生活が我々に対して持っている批判的側面というのを認識する。我々の考え方や自然に対する関係とかに対する批判的側面というものを読み取るということがまず第一だと思います。具体的にそれ以上にどうしたらいいのかというと何とも申しようがないのですが、当面の課題としては、そういう人びとの生活を混乱に陥れないようにすること、そのためには、伝統的なものをもう少し評価すべきではないかということだと思います。

アフリカの場合は国民経済が特に冷戦終結後、極端に悪化していっていますから、開発の手が一方では非常に進んでいるのですが、ある意味では逆にストップしている部分があります。経済が破綻することによって、逆に伝統的なものが再評価されるような土壌ができ上がっています。そういうものを拾い上げて、それが持っている可能性を検討するということをしないといけないと思います。

井上　森の民が生態系の論理にしたがって生きているのに対して市場の論理があるというお話でした。それに関して事実確認をさせていただきたいと思います。

なぜそういう質問をするかと申しますと森の民は豊かだ、それはそのとおりだと思います。私もカリマンタンの森の民と接してそう思っています。ところが世の中はそういう森の民の文化というものが、文明の世界に同化してゆくのが当然だと考えている人がむしろ多いのではないかと思います。

そういう流れに対してある程度主張するた

めには二つ方法があると思います。一つは感性に訴えること、もう一つは、理性で説得し、訴えるということです。これから質問することはどちらかというと理性の方に関わることで、事実かどうかということです。

ムブティの人々は森あるいは植物の利用においてそういう森を再生のため、あるいは資源利用のための社会的な規制があるのかどうか。なぜこういうことをいうのかというと、外からの文明、外からの市場経済の浸透というものに対してあまりにも弱すぎるという感じがします。これはムブティだけではなくて世界の森の民がそうだと思います。その場合に、社会的に埋め込まれた規制があるのかないのかというのは非常に重要ではないかと思います。逆にそういうものがないとするならば、彼らは自然の中にある意味でとけ込んで自然の一部として生活しているといういい方があると思います。ムブティの人々に関してはどうかということを教えて下さい。

市川　いまおっしゃった社会的な規制ということですが、彼らが意図的な資源の管理をしているかどうかというと、それはあまりないのです。先ほどいいましたように、森というのはもう彼らの感覚では尽きることがないものです。ただ彼らが実際にやっていることを見ますと、例えば移動ということをします。あるところで取れる獲物や植物の量が少なくなっていくと、相談してキャンプを移動していきます。決してその場で取り尽くしてしまわないのです。取り尽くしてはいけないというのではなくて、あるところに一定期間以上いると、だんだん狩猟や採集の効率が落ちてくる。つまり一日猟に出てもあまり獲物がとれないという日が続くようになるのです。そうすると移動するわけです。そうしておくと、次にそこにもどってくる時には充分な資源が回復しているということになっているわけです。

意図的な、いわゆる社会的な規制がないと資源が管理できないかというと、私は必ずしもそうとは思いません。確かに規制があった方が強いと思いますが、あまり物欲を刺激されなければ、そこそこ人間は上手にやってゆくものだと思います。しかし、例えばそこに商品経済が一挙に入ってきて、現在よりはるかに大きな欲望が刺激されるようになると、資源に対する規制や管理、権利などが十分に確立されていないと資源の維持は難しいだろうと思います。彼らのいまの生活を見ていると際限のない欲望にとり憑かれて、どんどん取っていくというような感じではないわけです。いずれはこのままではいけないだろうから、その時に備えて、いままでの慣行とか効果をよく意識せずにやってきたようなことを、意識化してゆくというような作業が必要ではないか、そのためには色々外の人とディスカッションしたり、そういうこともちろん必要だと思います。

増田美砂　筑波大学の増田です。例えば林産

物を見ると実は19世紀の頃、もう国際商品化しています。輸出統計を見ると、ある一つの産物の寿命というのは非常に短い、次々に違う産物が生まれては消えていくのですが、住民の生活から見ても爆発的な変化が、もし60年代、70年代以降だとしたら、その間の人口増はたかだか年数%というレベルの話で、そうすると、一体何が爆発的に変化しているのかというのが、私にはよく分からなくなっているところがあります。先ほどのザイールのランドサットの画像の下の方ですが、それはかなり長い期間の結果生じていて、私たちが情報を得るようになったのがつい最近ですから、大変だと言い立てているだけなのか、それともそれ以外の何か、例えば農耕の変化、消費水準の格段な飛躍、そういった人口増を超えるような要因の有無についてお尋ねしたい。

市川　まず林産物の方からですが、確かにアフリカでも19世紀あるいはそれ以前から林産物は取り引きされてきたのです。しかし、林産物の利用といっても、非木材森林資源の利用と、木材の利用とはちょっと違うのです。木材というのは切ってしまえばそれで終わりで、つまり最終産物、植物の生産する死骸を使っているわけです。しかし、非木材産物は、再生可能の木とか実とか葉と、そういう植物が生きた状態のままで生み出す産物です。木を切ってしまうと、その元手そのものを奪ってしまうことになりますから上手くない。しかし、木を切らないで、その産物を上手く利用すれば、森林の保護とその利用を結合できるのではないかということです。実際に、イトゥリの森のような奥地で19世紀以来利用されていたのは、樹脂や象牙などの非木材資源で、伐採のように森を破壊するようなものではなかったのです。

それから「爆発的」ということですが、確かに人口増加というのは一つの要因ですがそれだけではないのです。いまおっしゃったように、一方では商品作物の栽培というのが入ってきて、消費水準というものが高くなるということがあります。しかし、ザイールの場合は特にそうしたことに加えて1981年に経済の自由化があって、それまで禁止されていた砂金の採集とか、制限されていた住民の移動というのがかなり緩やかになったのです。それをきっかけに人々が森の中に入ってきたということがあります。もちろん、それ以前からも不法に入っていたわけですが、自由化されて、それが合法化されることによって、それが一挙に増加したというような状況があります。それがああいう爆発的というか、人口稠密な南東部からバッと膨張しているような形の植生破壊になっているのだと思います。それ以前の森林の開拓は道路に沿って人が入ってきて、道路の両側を線的に開墾するというやり方でした。

増田　開発の面的な広がりについて歴史的情報が不足しているのではないか。例えばジャ

ワでは19世紀に開発が進んだと思いますが、その時にスマトラとか、ボルネオでも、あるいはずいぶん進んだのではないですか。ですから、情報の不足の結果、すべてジャングルだったと私たちは思い込んでいるだけなのか。ニューギニアのハイランドなどほとんど森林植生はありません。そこは国際的商品や国際経済の動きと無縁な所で生じた現象だと思いますが。

古川　一つは、道をつける技術がものすごく進展して、相当奥まで入り込めて面的な開発を随分加速したという印象です。

ニューギニアでも林がないのだから、インドネシアも林の消失が古くから進んでいたのではないかというご質問ですが、この二つの地域は性格が違う。ニューギニアは定着農業の世界だが、インドネシアはコレクターの世界ですから、値打ちのあるものだけ採集する。材木に値打ちが生まれたのはごく最近で、それまでは林は放置されたと思います。

増田　例えば人口増加率が２％で増えたとして、エネルギーの増加量は、インドネシアでも２％どころではなく数十倍になっています。そうするとそれは人口増加の傾斜以上に生活パターンの変化で上積みがどんどんされているということになるのではないか。それは言ってみれば私たちの生活に近づいてきているのでは、まさに結構なこと、本当はもっと発展すべきだとしか私達としてはいいようがない。

古川　大量消費が文化の進歩なのでしょうか。我々に近づいて来なさいという傲岸さは私は持ち合わせていません。